

- 日 時：2019年7月21日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「神様を信じ、従うこと」
- 聖 書：旧約 エレミヤ書 38：1-13（p1249）  
新約 使徒言行録 20：7-12（p253）
- 讃美歌：224「われらの神」、403「聞けよ、愛と真理の」

お早うございます。

初めに、今日準備したメッセージに入る前に、ぜひお話ししたい事があります。

それは、昨日の中国語礼拝の後で起きた出来事でした。

私たちにとって、中国の大切な信仰の友であるTさん一家がいます。Tさんとお連れ合いのKさん、それに生れてから1年に満たないY君です。私は、Tさんには中国語礼拝のある時には必ずメールをします。やはり母国の言葉で礼拝を行うことはとても大切であると思っているからです。昨日もTさんは礼拝に出席し、終わった後、通訳のI先生を囲みながら皆で懇談の時を持ちました。その時です。Tさんが突然私たちに向かって、聞いて欲しいことがあると言いました。そして、I先生に通訳を頼んで、中国語で話し始めました。その内容は、イエス様の愛についての事でした。

Tさんは、映画の勉強をしに、来日しました。そして日本語を学んだ後、研究生として東大に入り、美学を学んだのです。しかし、日本語が難しいため、1年の後に研究生生活を辞め、就職をしました。そして、結婚をしていたTさんに初めての子どもが生まれます。Y君です。

昨日のTさんの話しは、そのY君を通して知らされた彼の信仰を語るものでした。

Tさんは、神様がイエス様の十字架によって私たちに示された愛を、Y君を通して知るようになったと言うのです。そして、神様の私たちに対する愛は、何か劇的なものではなく、当たり前の中での日常生活の中で示されているのではないかと言うのです。

朝起きてY君の世話をし、家族で当たり前のように過ごすその時その時に、神様は私たちに確かなその愛を示して下さっていると語ったのです。

さらに、次のようにも語りました。

自分が日本に来て東大の研究生になった時、やはり学位を取りたいとか、有名になりたいとかの野心があった。でも、神様の愛を知った今は違う。今こうして家族が皆平和に過ごせている、この事実こそ、神様に愛されていることであり、この事が何よりも大切であることが分かったと言うのです。

そして、さらに、この自分たちに与えられている平安を、隣りに宣教しなければならないとまで言ったのです。

驚きました。

そして思わず、私は彼に、「Tさん、牧師になったら」との言葉を語りました。

Tさんが洗礼を受けたのは昨年のクリスマスです。それからわずか半年にして、Tさんは神の

国の奥義を理解し始めたように思います。

「神の国は、あなたがたのただ中にあるのだ」と言う、イエス様が語られた神の国の奥義をです。ヘブライ語のシャロームと言う挨拶の言葉は、「あなたがたに平安があるように」という意味です。台湾語では、クリスチャン同士はお互いに「平安（ピンアン）」と言う挨拶の言葉を交わします。つまり、「平安があなたの、そして私心の裡にあるように」と言うお互いの祈りを言い表しています。Tさんが、神様の愛は、自分がY君を見る時に覚えるような、ごく自然に愛おしさを感じるそのようなものではないかと言う時、彼の心は神様に向かい、彼の心の裡は平安で満たされ、まさに何気ない日常生活の営みの中に神の国を見出しているのです。

そして、神様の愛を感じたその心は、隣人にその愛を、心の中に生れたその平安を伝えずにはいられない宣教へと彼を駆り立てるのです。

昨日、私たちの目の前で起きたその出来事を、初めに皆様にお知らせしたいと思った次第です。

それでは、今日のメッセージに入りたいと思います。

信じられないほどの悲惨な事件が起きました。

京都市伏見区のアニメ制作会社で起きた事件です。

新聞の一面の見出しを見た時、言葉を失いました。

いかなる理由があったにせよ、一度に33人もの命が失われ、死者は日を追って増えています。

その惨劇に巻き込まれたのは、33人だけではありません。

彼／彼女一人ひとりにはかけがえのない家族がおり、又親族や友人・知人がいます。

その数を合わせれば、数百人に上ります。

その彼らの人生に、残酷なまでの刻印を押したのです。

会社の事業に対する不平・不満が憎しみとなり、無差別殺人となりました。

容疑者は、事件を起こした理由について、「（自分の書いた）小説を（会社に）盗まれた」と言っているようですが、このような現実を前にして、私たちは言葉を失うのです。

しかし、先週の木曜日、すぐ3日前に起きた現実を受け止めようとする時、私は、今なお世界各地で起きている無差別テロを想起せずにはいられませんでした。無差別テロだけではありません。民族紛争の中で犠牲となった何の罪もない数知れぬ大人たち、子どもたちを思うのです。

神様によって祝福され、生を肯定された無数の命が、同じ人間の手で奪われて行く現実を前にして、私たちはどのような言葉を語れるのでしょうか。福音は、そのような悲惨な現実に対して、果たして無力なのでしょうか。

今日私たちに与えられた御言葉は、まさにその問題を私たちに投げかけています。

主イエス・キリストの福音は、暴虐な現実を引き起こす人間の前にあっては何の力も無いのかと言う問題です。

旧約聖書から見て行きたいと思います。

エレミヤ書 38 章 1-13 節の御言葉です。

神様からユダヤの民に告げるべく託された御言葉の故に、エレミヤは水溜の泥の中に投げ込まれ、命の危機に瀕します。滅亡寸前の南ユダ王国を救おうとする役人たちに対し、こともあろうに、抵抗を止めて敵に降伏することを勧めたのですから、役人たちの怒りを買うのは当然でした。それでは、エレミヤの預言に敵意を抱き、彼を殺そうとした役人たちの前にあっては、神様は無力であったのでしょうか。

新約聖書のこの箇所も又、同じ問題を私たちに投げかけます。

使徒言行録 20 章 7 節-12 節です。パウロの話しを聞いていた青年エウティコが、眠気を催して 3 階から落ちて死んでしまいます。福音を告げ知らせるパウロの話しが、聴く者たちを慰め、励まし、生きる希望を与えるのではなく、死者を出してしまうのです。ここでも又問われているのは、福音は無力であるのかと云うことです。

福音は無力なのか、それともそうで無いのか。

この事に答えを出すのは、他の誰でもない、私たちです。

エレミヤ書では、エレミヤが水溜の泥の中に投げ込まれ、今まさに殺されようとしたその時、エレミヤを役人たちに渡した王の心が翻意し、エレミヤは救い出されます。

王の心の変化を促したのは何でしょうか。

それは、まさしくエレミヤの信仰でした。

より正確に言えば、神様からの降伏を勧める預言をすれば、自分は確実に殺される。そのことを承知の上で、なお神様に従うエレミヤの信仰でした。

そして、神様は、エレミヤのその信仰において、王の気持を変えさせました。

使徒言行録です。

この若者を生き返らせたのは、やはりパウロの信仰でした。

主イエス・キリストの福音を宣べ伝える時、神様はその伝道の業に躓きの石を置く事など決して無いとのパウロの確信。だからこそ、エウティコが 3 階から落ちて死んでしまったと人々が騒いでも、パウロは全く動ぜず、彼の上にかがみこみ、抱きかかえて生きていることを人々に告げて話しを続けます。

エレミヤの神に従う信仰と、パウロの福音伝道は神様が成せる業であることの確信、それがエレミヤの命を救い、パウロの宣教の業を妨げなく続けさせたのです。

そして、これらの事実をもって、この日本の、そして世界の現実を照らし出す時、私たちは次のことを学びます。

即ち、人間が成す罪の業、そのためにこそ、主イエス・キリストは十字架にお架かりになったのだという事をです。

十字架の出来事は、遠い 2,000 年の昔の出来事ではありません。私たちが生きている今まさにこの時、私たちはイエス様の手と足に打ち付けられる釘音を聞き、十字架を見るのです。

イエス様は、今なお十字架に架けられて、私たちの犯す罪を背負い続けて下さっています。

この世の闇が深ければ深いほど、十字架から放たれる光、それは主イエス・キリストの罪の赦しの光ですが、その光の輝きは増します。

この世の絶望が深ければ深いほど、主イエス・キリストは私たちに先立って自ら絶望を背負って下さいました。そして、死の淵より、その絶望を突き破って復活し、希望の光を輝かせて下さったのです。

主イエス・キリストの十字架による罪の赦しを信じる者への救いの約束は、この地球上でどのような悲惨な出来事が起きようとも、決して変わることはありません。

そして、どのような惨劇の渦中にいようとも、神様は必ず私たちをその御手の内に置いて下さいます。

神を信じ、キリストの福音を信じて、それぞれが遣わされた場において、雄々しく歩み進もうではありませんか。

祈りましょう。